

# 石を投げるより残酷に



大学法学部法学科教授  
大学宗教主任  
塩谷直也  
SHOTANI Naoya

律法学者たちやフアリサイ派の人々が、姦淫(かんいん)の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦淫をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか」(ヨハネによる福音書第八章三〜五節)。

石を投げて人を殺すなど「何と残酷な時代！」と読者は嘆くかもしれない。しかし、そうとも言えない。確かに人を殺す道具としての「石」ではあるが、実際に投げるまでにそれなりの手間を要する(人を殺せるほどの石の大き

相手にどれほどの打撃を与え、血を流したかを全く見ないですむ。現代の投石による処刑は、二〇〇年前より格段にデジタル化―洗練され残酷なものとなった。この処刑を下支えするのが投石する側の匿名性だ。自分の正体を明かす必要がないからこそいくらでも残酷になれるし、相手への自責の念も湧かない。

二〇二〇年、女子プロレスラーの木村花さん(一九九七〜二〇二〇)はコロナ禍でステイホーム中、自身が出演するテレビ番組に対する批判コメントを、毎日百通近く読んでいた。

「お前が早くいなくなればみんな幸せなのにな。まじで早く消えてくれよ」。百個の言葉の石が毎日、木村さんの体を打つリングで鍛えた体であっても打ちのめされるのに時間はかからなかった。木村さんは以下のよう

に返信する。「死ね、気持ち悪い、消えろ。今までもずっと私が、一番私に思っていました」。彼女は自ら命を絶った。「石」を投げた匿名連中は、すぐさま姿を消した。

イエスと女も、この無責任で残酷な匿名の男たちに取り囲まれた。群衆は迫る。イエスよ、石を持つ側に立つのか、それとも女を庇(かば)うのか? イエスはこの議論に乗っからず、斜め上

さはこぶしほどでは足りない。かなりの重さの石を、的確に急所に当てなければ絶命に至らない。そう考えると実際にこの刑罰がどのくらい行われたかに関しては様々な疑義が呈されているが、この議論はとりあえず脇に置く。最低でも「死刑執行」までに、以下のプロセスは必要だろう。

- ① 石を探す  
どの石がいいか。尖っている方がいいのか。でも当たったら痛いだろうな……。
- ② 見つける  
これがいい! でも当たったら痛いじゃすまない。石の重みが、心にのしかかる。
- ③ 手を上げる

から応答する。「あなたがたの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」(七節)。

イエスは逆に迫る。「石を持った皆さん。あなたは生まれてから一度も意地悪をしたり、陰で悪口を言ったり、人のものを盗んだり、ズルしたことはないのですね。妬んだり、嘘をついたりしたことなければ、いやらしいことを一度も考えたこともなく、相手を見下したり、馬鹿にしたりしたこともない。あなたは何て素晴らしい人! そんなに立派な人物なら、群衆にまぎれずに今すぐに顔と名前を見せ、堂々と石を投げなさい」。イエスから匿名性を奪われると気づいた男たちは一人ずつ去る。結局、自分の身を明かさないのですむからこそ、正義を高らかに語れた小者たちであった。

やがて彼らが去った静寂の中、イエスは女に厳かに宣言する。「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはいけない」(一一節)。石を持った人々は女に「死ね!」と迫った。しかしイエスは「生きよ!」と言う。この言葉は女に対してだけでなく、今を生きる私たちへの告知だ。

木村花さんのお母さん、木村響子さんは述べる。「中傷している人も、助けを求めている。『死ね』と言う人は、どこかで自分も『死ね』と言

目の前に女の表情が見える。おびえて泣いている。私の妹、娘の顔と重なる……。

- ④ 決断  
えいつ! やるんだ! 考えるな! 感じるな! みんなが見ている、やるしかない!

石で打ち殺すのであれば、これらの段階を経なければならぬ。途中で気持ちが萎えることもあろう。残酷に見えるがその節々に、実は執行停止の「歯止め」がかかっている。

しかし、現代はこの「歯止め」がかからない。なぜなら人に投げつける石は、今の時代「SNS上の言葉」と形を変えたからだ。①②③④のプロセスをすつ飛ばし、指先一つで世界中に大きな石を瞬時に投げ込める。しかも、その石が

う気持ちを抱えているから、人にマイナスな思いをぶつけてしまうのだと思いました。

石を投げようとする私たちの体内に「死ね!」との言葉が巣食っているらしい。自分自身に対して「死ね!」と常々思っているからこそ、他者にもこの言葉が自動的に溢れ出る。一方、イエスの体には命が充滿する。彼の別名は「命」(ヨハネによる福音書第一四章六節)だから。そのイエスが女に、そして私たちの体に「生きよ!」との言葉、息を吹き込む。その息吹は、私たちの内の澱(ため)んだ空気を追い出しながら囁く。「この手は冷たい石を投げるためではなく、誰かの冷たくなった手を温めるために使いなさい」と「殺傷力の高い短文を書き上げ、送信ボタンをタップするためではなく、慰めのメッセージを綴り、友の背中にそつと触れ、支えるために動かさなさい」と。

ネットリテラシーを学ぶだけでは決定的に足りない。まずは体内から「死ね!」との言葉を排出し、「石」を速やかに手放すためにも、学院全体で命のパン(ヨハネによる福音書第六章三五節)であるイエスを常食としたい。

